

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月30日現在

機関番号：17701  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520620  
 研究課題名(和文) 単位の実質化と自己学習力構築にむけた初年次英語教育カリキュラム評価方法の開発  
 研究課題名(英文) The Development of an Evaluation Framework in First-Year College EFL Curriculum: Aimed at Substantiating Course Credits and Facilitating L2 Learner Autonomy  
 研究代表者  
 金岡 正夫(KANAOKA MASAO)  
 鹿児島大学・教育センター・准教授  
 研究者番号：00311118

### 研究成果の概要（和文）：

科研申請書の3か年計画に基づき、一年目は情報・資料収集および訪問調査を行い、課題名に係る理論構築に専念した。他方、研究分担者を交え、シンポジウムを開催した。二年目は理論をもとに、初年次英語学習実態アンケート調査を実施し（関東・甲信越地区と九州・沖縄地区の国公立大学対象）、大学・短大1年生2747名から回答を得た。加えて同地区の初年次英語教員対象アンケート調査も実施した。三年目はそれらの分析、考察、まとめと提言を所収した成果報告書を作成した。

### 研究成果の概要（英文）：

This three-year research, based on a grand scheme articulated in the research application form, has been accomplished through the following three stages: (1) creating a theoretical framework by collecting related printed materials as well as conducting interview-focused field research (i.e., in the first year), (2) administering extensive questionnaire surveys targeting first-year college EFL learners (in both Kyushu-Okinawa and Kanto-Koshinetsu regions; gaining 2774 valid responses as a result), together with a similar survey for EFL instructors in the same regions (i.e., in the second year), (3) analyzing the yielded data through quantitative analyses then presenting discussions, limitations, implications, and conclusion, all of which were compiled in the form of a comprehensive research progress report (i.e., in the final year).

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：初年次英語教育、カリキュラム、単位の実質化、自律学習、社会構築主義、教師教育、人格形成、言語政策

### 1. 研究開始当初の背景

2008年、中央教育審議会大学分科会制度・教育部会答申「学士課程教育の構築に向けて」の初年次教育改革案の中で「学びの動機づけ」や「高等学校までの学習歴」がキーワードとなり、「学生にインパクトを与え、主体的に学ぶ態度を持たせることが重要」と謳われている。学力（＝結果）の質保証が重視される傍ら、その根幹（＝原因）たる自己学習力（ex. 自律的な学習方法、学習プロセス、学習習慣、そして学習評価）の育成に対する国家的取り組みや方策は一切触れられていない。本研究はそこに着目した。

自己英語学習スタイルの変化と再構築（＝自己学習力の形成）をめざして、大学1年生を被験者とした申請者（研究代表者）の事例研究が、本研究課題の起点となっている。「英語を」学ぶのではなく、「英語で」自己の存在意義（レゾン・デートル）を洗い出し、それによる自己変化・成長を精神的成熟の証しとして語っていく、そのための自己表現ツールという言語学習観を定着させることが研究目的となっている。自己変化・成長による学習態度、行為、習慣の変化・成長を促していくなかで、学力（アウトカム）ではなく、自己学習力（プロセス）の構築を研究テーマとして重視し、その重要性の証明に取り組んでいる。

昨今議論されている単位の実質化、つまり授業時間外の自己学習活動の質と量（ex. 自発性や自己調整学習能力）にも上記事例本研究は目を向けている。授業から離れた独自の学びの活動の意味づけ（目的意識と動機づけ）と定着・強化（系統・発展的積み上げ）をはかることで、学習観や学習態度の本質的変革を学習者が腑に落ちる形で進めていくことが何より重要であり、その実現こそが単位制度の実質化と学びの本質化につながると考えている。

申請者が勤務校で行ったアンケート結果によると、本年度新入生（200名以上）の9割以上が自分の英語学習スタイルに満足していない、続けたくないという結果がでている。以外な事実として、学習活動・習慣の不規則性（ex. 不定期な学習サイクル、差が激しい学習時間、ムラのある学習量）が主因であることと、それが学習意欲の欠如とも相関

していることが分析の結果、判明した。それは規律正しい、生産的な学生生活と生活リズムを築くうえでも自己学習力（学習観、態度、習慣、行為）の構築が不可欠であることを示唆している。いかえると受験やテストにむけた高校での「させられる勉強」から自分自身を学びの主教材とし、みずから意味づけを行い、それによって自律的・自発的に学習をとらえていこうとする「腑に落ちながら行う学問体験」を、半意識化でじつは望んでいるという仮説が成り立つ。

多彩な e-learning 教材の導入と成績・評価の一元管理が趨勢を極めつつある。だがそれは一斉学習、一律評価という従来型の教育・学習スタイル&アプローチと本質的に変わらない。TOEIC, TOEFL などの外部標準試験による学力測定・評価も増えつつある。学会発表や紀要を見ても、たとえば読解力や聴解力の向上といった、スキルに特化したアウトカムのための学習/学びになりがちである。はたして学習者個人は、自己対峙しながら、独自の学習スタイルを自律的・自己調整的に構築し、定着化できたのか。卒業（後）まで持続したいという学習信念と確信を得たのか。そのような内面世界と行動変化にまで踏み込んだ研究はあまりみられない。

徹底した自己対峙（自己対話、省察、モニタリング、調整）を学習スタイルの根幹（学習過程）に据え、その実行性と到達度、さらには問題点の発見や解決方法にまで評価の幅を広げたカリキュラムデザインこそが、学士課程のスタート地点でもある初年次教育の重要要素である。その一方で、価値観や信念形成など、自己アイデンティティ構築に関わる要因を学力と自己学習力との関係解明に加えようとする研究はあまり見られない。ましてや(1) 大学生たる自己アイデンティティ（自分らしさ）の構築、(2) 学力、(3) 自己学習力、これら3極の統合的意味づけにむけて英語教育・授業・学習という機会を積極的に介入させていくという研究手法に則したカリキュラム評価研究はほとんどみられない。山田（2005）の報告によると、スキルだけでなく、学習態度や価値観、それによる学習行動といった情緒的要因を重視したアセスメントが米国大学ですでに始まっている。

## 2. 研究の目的

本研究が目指す第1の作業として、高大連携の観点からわが国の高校英語教育カリキュラム研究まで遡りながら、上記(1)－(3)を包摂したカリキュラム評価理論を構築していく。第2の作業は、大学新生に(1)－(3)の新たな学びの概念(高等教育＋言語教育)のなかで、単位の実質化を念頭に授業時間外学習活動(自己学習)を量的・質的に調査・分析していくことにある。自宅等での自主学習時間をみた場合、1日に1時間またはそれ以下の日本大学生は全体の6割にも達し(金子、2007)、それは有名国立・私立大にもあてはまる(溝上、2009)。これは大学入学後に始まる現象ではなく、自宅ですべて学習しない生徒が高2の場合、約23%、1時間未満だと合わせて6割近くになることがベネッセの調査(2008年)から判明している。そこでは学習していてもすぐやめる、続かないという飽きっぽさが主因となっている。先述のアンケート結果と通底するところがあり、この点を明らかにしていくことは、大学英語教育・授業改革にむけた一助となる可能性が高い。第3の作業は、米国大学で使われている自己学習力構築に向けた評価モデルを参考にし、わが国の大学生に適合した教育・学習カリキュラム評価モデルの構築を進めていく。そのため高等教育と言語教育の両側面を重視する必要がある。大学生を対象に自己形成、学習体験、学習到達などを評価・測定するツールとして、学習計画調査(LASSI)、全国大学生生活調査(NSSE)、大学生経験(CSEQ)、大学生ニーズ評価調査(CSNASS)などがインディアナ大学高等教育研究所等で開発されている。これらのツールを分析する傍ら、日本人学生向きに修正等を加えた新たなツールの開発を行い、その妥当性や効果を国内の教育現場の中で検討し、さらなる適合モデルを作り上げていく。この教育・学習カリキュラム評価モデルは、これからのわが国の大学英語教育の指針づくりに貢献するものと考えられる。

## 3. 研究の方法

本研究の課題を、以下3つのグループを組織し、遂行していく。一年目の計画として、Group 1は、自己アイデンティティ、学力、自己学習力、英語教育・授業という視点から統合的カリキュラム理論を構築する「カリキュラム理論構築」作業班(金岡、樋口担当：第一者が責任者。以下同じ)、Group 2は、国内の大学の実態調査(ex. カリキュラム概念の実情把握、学生の英語学習に関する聴き取

りやアンケート)と分析を行い、本研究の理論の妥当性を実地検証していく「国内調査・検証」作業班(横山、渡辺、金岡担当)、Group 3は、既述した米国大学生向けの自己学習、自己成長評価ツールとそれを用いたカリキュラム評価モデルの分析をもとに、日本人向けにその応用可能性を精査していく「海外調査・分析」作業班(金岡担当)である。

二年目の計画として、平成23年度の作業は、平成22年度のGroup 1のカリキュラム理論構築の成果、Group 2およびGroup 3の調査・分析などをふまえて、カリキュラム評価モデルを構築し、その実効性と適合性を検証する。一部大学から協力を得ながら、初年次英語授業の中でどのような結果と反応が得られるか検証していく。それをもとに理論・実践両面から問題点の洗い出しを行い、Group 2, Group 3の調査・分析結果をもとに、Group 1で検討したカリキュラム理論の再検証をすすめていく。3つのグループ間での円環作業を通して学びの本質化と単位制度の実質化につながる初年次英語教育のカリキュラム評価方法を確立していく。

三年目にあたる平成24年度の最終作業では、平成22年度のカリキュラム評価モデルの構築とその実効性と適合性を検証、そして平成23年度の間的成果報告をもとに、さらなる検証、考察、修正を行う。その最終成果とあわせて、課題点や問題点とその原因も考察する。それを最終的な成果報告としてまとめ、研究発表、研究論文執筆、研究報告書の作成・製本・送付という形で仕上げていく。

## 4. 研究成果

一年目の研究目的と研究計画にもとづき、英語学習者の自律学習におけるメカニズムについて理論的考察を行った。他方、カリキュラム理論の包括的研究を行い、(1)学校教育、(2)日本の英語教育、(3)高等教育、(4)初年次教育、(5)欧米を中心とする言語政策、以上5つの分野から歴史的考察を行った。そのうえでカリキュラムの政策、構築、評価のあり方について、わが国の今後の大学英語教育の方向性を軸に理論的な総括を行った。その際、新たな検討材料として、小学校から高等学校における新学習指導要領の施行があげられる。そこで高大接続という現在の取り組みをこえ、小～大連携を視野に入れた英語教育カリキュラムのあり方をユニバーサルな課題として捉え、そこから大学初年次英語カリキュラムはどう構築され、実践・評価されていくべきかという視点からも理論的考察を行った。その成果を2010年12月12日、鹿児島大学で開催された第39回九州英語教育学会鹿児島研究大会で発表した。研究分担

者をパネリストに加える傍ら、地元の小、中、高校英語教育の関係者を招いたシンポジウムを開催し、大学初年次英語教育のあり方について包括的な議論を交わした。その内容の検証にむけてシンポジウムのアンケート調査結果を分析し、今回のカリキュラム研究の修正点を洗い出した。それを次年度の研究（カリキュラムに関するアンケート作成等）への布石とした。他方、大学初年次教育の研究動向を調査するため、計画どおり米国インディアナ大学高等教育研究センターを訪問した。新入生の大学生活全体に対するアンケート調査（CSEQ）の内容と最新データを収集する一方、それらがわが国の初年次英語教育カリキュラムにどのように関わっていくことができるか、同センター研究スタッフと議論を交わした。また同大学附属図書館にて、上記1)－5)に関する文献収集と新たに研究・調査すべき分野について検索活動を行った。

二年目の研究目的と研究計画にもとづき、(1)1年目に行った理論的枠組みの整理、(2)それによる初年次英語授業カリキュラムのデザイン化、(3)理論的枠組みに照らしたアンケート調査を実施した。(1)では欧米の外国語教育政策の流れとカリキュラムの歴史的流れを照応して要点整理を行った。くわえて初年次国語教育政策はリベラルアーツの理念とどう複合的に交錯しているか調査するためにオクスフォード、ケンブリッジ両大学図書館を訪問し、両大学の外国語教育カリキュラムに関する資料収集を行い、共通点の洗い出しを行った。(2)では初年次英語授業を一部利用し、社会構築主義の英語教育カリキュラムモデルとその評価基準を考案し、そのモデルの問題点を考察した。これは(1)のカリキュラム理論の応用実践であると同時に、今年度から3年間の間に段階的に施行される小～高の新学習指導要領（注：社会構築主義による教育カリキュラムの導入が注目される）との理論的共有化を考慮したものである。(3)では大学（短期大学含む）1年生を対象とした初年次英語授業および英語学習に関するアンケート調査を平成23年10月～12月に行った（関東甲信越地区および九州沖縄地区の国公立私立大学生：研究分担者の都合上、上記2地区で実施）。マークシート方式で2000名以上からの回答を得た。同地区の初年次英語教育担当教員宛にアンケート（質問兼回答用紙へ直接記入）の送付も行った。学生アンケートは回収済みで、これから集計結果の分析作業に入る。教員アンケートも回収がほぼ終了し（100名以上からの回答）、同じく集計・分析作業に入った。

三年目（研究最終年度）として、昨年度（2

年目）に実施した、関東・甲信越地区ならびに九州・沖縄地区の国公立私立大学（注：国立大学校および私立短期大学（部）を含む）の1年生対象のアンケート調査（2747名回答）の結果分析、考察、そしてまとめとしての提言をおこなった。くわえて上記2地区で、初年次英語（1年次開講英語科目）に携わる大学・短期大学英語教員（注：非常勤含む）を対象としたアンケート調査も昨年度におこない、結果の分析と考察をおこなった。具体的には、これら2種類のアンケートに係る結果の分析から提言までをまとめあげ、研究成果報告書『単位の実質化と自己学習力構築にむけた初年次英語教育カリキュラム評価方法の開発』（課題番号22520620）として製本化した。この成果報告書には、本研究1年目の研究目的および成果である、研究課題に係る理論的枠組みの構築を踏まえた論考も所収されている。アンケート調査（上記大学・短大1年生）に参加協力頂けた研究協力担当大学（アンケート実施協力英語教員）に対して、謝意とともに上記報告書を謹呈（郵送）する準備を進めている。また、教員対象のアンケートに協力いただいた英語教員に対しては、上記報告書のPDF版をメール送付する準備を進めている。郵送、メールの両方とも、平成25年4月中に発送もしくは送信し、完了となる。また、今回のアンケート関連とは別に、本研究の成果として、1年目の理論的枠組みとそれをもとにした授業実践（パイロットスタディ）を構築・実践した結果を、それぞれ研究ノート、研究論文としてまとめ、所属学会紀要へ投稿し、査読のうえ、数編が掲載となった。くわえて所属学会の研究大会でも研究成果の発表を行った。また、所属学会からの派遣（研究交流）として、RELC（シンガポール）主催の国際学会でも発表を行った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計8件）

1. Kanaoka, M. (2012). A present-and future-integrated socio-constructivist L2 learning context and related curriculum: Exploring the effects on learner autonomy. *Annual Review of English Learning and Teaching*, 17, 19-38. (査読有)
2. Kanaoka, M. (2012). The impacts and issues of the revised new courses of study: An analysis of educational, language, and curriculum policies. *九州英語教育学会紀要*, 40, 109-117. (査読有)
3. Kananoka, M. (2011). Beyond accuracy

and fluency: An oral English course to establish self-efficacious assessment criteria in the learning process. Annual Review of English Learning and Teaching, 16, 15-33. (査読有)

4. 金岡正夫 (2011). シンポジウム報告「大学から見た英語学習の本質—「勉強」から「学び」へのカリキュラム転換に向けた小～大連携は可能か」九州英語教育学会紀要, 39, 99-110. (査読有)

5. 金岡正夫 (2011). 「初年次英語教育カリキュラム構築に関する一考察—精神的成熟とシチズンシップにむけた自己の気づきと言語使用をめざして」ESPの研究と実践, 10, 1-18. (査読無)

6. 金岡正夫 (2011). 「「自己対峙言語力」—その定義とESP授業づくりへの理論的枠組み」ESPの研究と実践, 10, 19-35. (査読無)

7. Kananoka, M. (2010). Take-home assignments aimed at developing learner identity and self-directed EFL learning. Annual Review of English Learning and Teaching, 15, 1-19. (査読有)

8. Kananoka, M. (2010). 1st-year college ESP course aimed at the maturity of spirit: A new pedagogical paradigm focusing on character forming. ESPの研究と実践, 9, 1-14. (査読無)

[学会発表] (計 6 件)

1. 金岡正夫 (2013). 初年次英語教育カリキュラムの実働化にむけて—一科研究成果報告書をもとに— 第 20 回大学英語教育学会九州沖縄支部 ESP 研究会 (3 月 28 日、宮崎県立看護大学)

2. Kananoka, M. (2012). Reconsidering multiliteracies: The necessity of integrated language curricula in Japanese higher education. 47th RELC International Seminar (4 月 17 日、Southeast Asian Ministers of Education Organization (SEAMEO) Regional Language Centre, Singapore).

3. 金岡正夫 (2012). Learner Autonomy のための ESP に向けて—一科研アンケート調査の目的と展望— 第 17 回大学英語教育学会九州沖縄支部 ESP 研究会 (2 月 18 日、鹿児島大学)

4. Kananoka, M. (2011). The pedagogical and curricular implications of the New Courses of Study 第 40 回九州英語教育学会宮崎研究大会 (12 月 10 日、宮崎県立看護大学)

5. Kananoka, M. (2011). A Restructuring of EFL Curriculum Policy in Response to the New Course of Study and Post Globalization 第 50 回大学英語教育

学会 (JACET) 国際大会 (8 月 31 日、西南学院大学)

6. 金岡正夫、横山千晶、渡辺敦子、牧原勝志、原崎竜一、荒田修 (2010).

大学から見た英語学習の本質—「勉強」から「学び」へのカリキュラム転換に向けた小～大連携は可能か— 第 39 回九州英語教育学会鹿児島研究大会シンポジウム (12 月 12 日、鹿児島大学)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金岡 正夫 (KANAOKA MASAO)

鹿児島大学・教育センター・准教授

研究者番号: 00311118

(2) 研究分担者

樋口 晶彦 (HIGUCHI AKIHIKO)

鹿児島大学・教育学部・教授

研究者番号: 20189765

横山 千晶 (YOKOYAMA CHIAKI)

慶應義塾大学・法学部・教授

研究者番号: 60220571

渡辺 敦子 (WATANABE ATSUKO)

国際基督教大学・教養学部・講師

研究者番号: 70296797